
フェイスレス・アンコールロックン

早苗月 槐

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

フェイスレス・アンコールロツキン

【Nコード】

N5293L

【作者名】

早苗月 槐

【あらすじ】

フェイスレス・ロツケンロールの外伝。

希望により、或いは自分の気分次第で増えていくので更新は不定期
あらずじ及び予定

encore01 あの家上の日から一年。アヤとカイリの関係は、
着かず離れずを続けていた。

そんな二人の関係を変えた事件。
そんな話。

encore02 大学生になったミヤとレイン。

事件はいつも唐突に。

二人は同棲を始めました。

そんな話。

encore 03 “フェイスレスには二人のベ이스トが居る”

カイリ以外のベ이스トとは！？

珍しくギャグテイスト。そんな話。

題名は the birthday より。

encore 04 伏線回収、レインとユウキの関係は？そんな話。

encore 01: nothing but love

きっかけは些細な事だった。

他人から見ればそうかもしれないけれど、僕にとってはそうでは無い。

もしかしたらアヤにとっても。

他人にとってはなんでもない。

よくある、そんな話。

夏に入った。

僕等はもう二年生で、僕とアヤの関係は、付かず離れずのぬるま湯みたいな関係で“寒い冬ならさて置き、夏にはさっぱりした方がいいんじゃない？”とはミヤの談。

正直、僕は今の関係に妥協してアヤの隣でベースを弾く只一人というポジションに満足していた。

クラスメートの男子と夏服のワイシャツから透ける下着のラインについて熱く（僕は生活委員としての見解ですよ？）語っている時に、ふとその話題になった。

「結城って最近学校きてるよな」

クラスメートの言葉に一瞬どのユウキかと思ったけど、話の流れ的にアヤだろう。

「そうだね、皆勤じゃない？」

今所。

と付け足す。

彼女の持病である所の喘息は、台風の来る、秋口に辛くなるらしい。

去年もそうだった。

「向坂って、結城と付き合ってるの？」

いつの間にか黙考していた僕は、酷く狼狽した。

「いや、そんな関係じゃ」

血が顔に登る。

真っ赤になっっているのが自分でも解る。

「あれ？じゃ、聞いてない？」

何を？

「結城、三年に告白されたんだってさ」

ガタンと、大きな音がした。

何かと思えば自分が椅子を蹴り飛ばして立ち上がった音だった。

一瞬で血が逆流し、今度は顔が青くなっているだろう。

心臓を直に握られたような気になって、心配するクラスメートの声も耳に入らず、僕は足早に教室を出た。

教室を出たその足でアヤの元へ向かう。

二年生のクラス編成で、クラスが別れたのだ。

他クラスの教室に入るのは気が引けたが、そんな事を考える余裕はどこかに飛んでいった。

幸い、生活委員の腕章を付けた生徒が生活態度の巡察に回るのはよくある話で、シャツを出していた生徒が慌てるくらいで何事もなく、教室に入れた。

アヤは、居なかった。

折り悪く予鈴が鳴り、僕は仕方無く教室へ戻る。

もやもやとした気持ちを抱えて。

気持ちの入らないまま放課後になる。

部室へ向かおうと、荷物をまとめて立ち上がると廊下から声を掛けられる。

「向坂君、今日臨時で生活委員会議あるって」

そこには同じ生活委員の腕章を付けた女生徒。

気持ちばかり逸る僕は溜め息をつき、その女生徒の後に付いて行く。

またタイミングを逃した。

結構遅れて部室に入ると、すでにみんな揃って軽くセッションをしている所だった。

「委員会お疲れ」

労うレインの言葉に軽く頷く。

あの屋上の日からもレインは変わらない。

ともすれば夢だったのではないかと思う程。

「お疲れ様ー」

ミヤは何時も通り笑って、スティックを上に掲げる。

取り損ねて、落とし、あちゃー、といった顔。

「あちゃー」

本当に言う。

期待を裏切らない反応には流石としか言えない。

そして、アヤはこつちを気にするようにちらちらと見る。

心が揺れる。

本当に心臓が震えるように思えた。

視界が僅かに揺らぐ。

いつの間にか、その大きさを広げたアヤへの思いは、重く頭を殴るように響く。

なんとかそれを押し込め、ケースからベースを引きずり出す。

純白のプレベに指を這わせチューニングするが、どうにも合わない。

動揺がこいつに伝わったようで、苦笑しようとしたが、うまくできたか分からない。

正直、最悪と言っても良い練習だった。

レインの眉は顰められ、ミヤは苦笑している。

アヤは無言のままムスタングを下ろし、僕もそれに倣う。

原因は明らか。

僕のベースが他のパートから離れて走り、或いは止まり、アヤの

ギターはそんなベースに反発するかのようリズムを刻んだ。

最終的にミヤがベースになんとか合わせようとドラムを叩いている内にスティックを取り落とし、レインが遂に待ったをかけた。最悪だ。

自己嫌悪に顔を上げられず、レインが近づいて来たのに気付くのが遅れた。

「何か悩み事かい？」

レインが耳元で囁く。

正直に言うわけにも言わず、僕は僅かに顔を上げる。

直ぐ目の前にはレインの顔。

既視感を覚える。

あの屋上の時を。

けれど、その瞳の奥には燃え上がる焔ではなく、寂しさ悲しさに沈む、風の水面があった。

「ねえ、あの日、屋上で言ったことを覚えている？」

そう問い掛けるレインに、僕は頷くしか無い。

「私じゃあ、君の支えにはならないのかい？」

そう言つて、頬に触れる手。

そして、その向こうに見えたのは、酷く傷付いた顔をして走り出したアヤ。

ドアをこじ開け、叩きつけるように閉める音が部室に響いた。

まるであの日の繰り返し。

でも、違うことが一つある。

「ありがとうございます」

レインに、礼を言う。

彼女は体を静かに離す。

「ほら、良いから追いかけなよ」

もう一度軽く礼をして、走り出す。

アヤを追つて。

着いた先は、屋上だった。

アヤは一人、給水塔に寄りかかる。

僕が出てきたことに気付いて、少し気まずげな顔をした。もう、迷うことはない。

「先輩に、告白されたって？」

そう切り出すと、アヤは目を見開き固まった。

「何でそんな話……」

「返事はどうしたの？」

畳み掛けるように言う。

少し意地が悪いかと思い、心が痛む。

アヤは顔を赤く染め、目に涙を浮かべていた。

やがて、意を決するように強く瞼を閉じる。

茜色の空に、涙が輝き、散った。

「断つたに決まってる。だって私が好きなのは……」

続きは言わせなかった。

距離はゼロ。

唇が重ね合わされている。

想い続けた時を埋めるように。

アヤは驚きに一瞬硬直したが、たどたどしく腕が背中へ回される。万に一つだが、別に好きな人がいる。

という事は無かったようで、安心した。

後で“ばか、遅すぎるよ”と涙目の上目遣いで言われたのは、余談。

「レインも不器用だよね」

「うるさい」

レインは唇を尖らせる。

その姿はいつものクールビューティーではなく幼く見える。そんなところも好きなのだけど。

「ああするのが一番手っ取り早いと思ったんだ」

そう言って、つんとそっぱを向くレイン。

正直じゃないなー、と苦笑する。

「笑うな、ミヤ」

そう言うレインも笑っている。

私達は顔を見合わせて笑った。

後輩の、いや仲間の恋路を暖かく見守って行こうじゃないか。

多くのバンドの解散理由は恋愛関係のもつれだけど、私達の関係はそんな事で壊れたりしない。

そのためのフェイスレス……不信の名。

信じなければ裏切られない。

臆病な、名。

「そろそろ、行こっか」

背中から抱きしめる形になっているアヤに、言う。

「うん」

涙の後は、もう少し腫れた目の周りにしか見えない。

体を離して歩き出す。

急に手を引っ張られて何かと思えば、手を繋ごうと言う事らしい。顔を赤くして、下を向くアヤのいじらしい姿に笑ってしまう。

僕等は、歩く。

横に並んで。

そこにはいつもあと二人、頼りになる仲間が居る。

たどり着くどこかまで、どこまでも。

encore 02 : GT400

事件は唐突だった。

正直、唐突ではない事件なんてものは少ないし、唐突な事件でも理由があるものだから唐突ではないとも言える。

矢張り、事件として発覚するのが唐突と言うことか。

いや、そも事件というものは……

などと禅問答をしても仕様がなない。

ミヤと私、レインの話だ。

アヤとカイリより一足早く高校を卒業したミヤと私は、家からもそう遠くない女子大に通っていた。

フェイスレスは解散せず、ただ高校の軽音楽部は別のバンドに明け渡した。

私からしてみれば受験の楽な女子大を受けたのは、そもフェイスレスを続ける為であったのだし。

あの高校からほど近いここだから、偶に校門前でアヤやカイリが待っている事もあり、二人とも静かな、奥手な所が受けるらしく女子大のお姉さまにきゃいきゃい言われている。

偶に胸が痛くなるのは秘密だ。

その実私は諦めが悪いらしい。

私は大学進学を期に一人暮らしを始めた。

家に居てはアヤとカイリの邪魔だろう？

それ以外は変わりなく、充実した日々が続いていた。

そんな日々の最中。

とある冬の日。

ベースを担いだ、黒髪長髪のどこかで見たことある同級生を追い抜き、丘を上がる。

同級生のバックにはシドチェーンが下がっていたけど、それは余

談。

いつもどおり授業に向かう。

ミヤとは被る教科が……半分意図的に……被っているのでよく顔を合わせる。

そうでなくてもバンドで顔を合わせるのだけど。

その日のミヤは何か様子が変だった。

なにより、マスクをかけていた。

いつも花粉症だ！。

等と叫んでおきながら、マスクはうざったいから嫌！。

なんて言っているのにである。

「おはよう」

と言つて肩を叩くと、少しびくりとして、その後まなじりを下げた。

「おはよう。レイン」

その声は弱々しく、少し不安になった。

けれどもそうこう言っている内に、講義が始まってしまい、追及する暇はなかった。

昼食の時間でさえいつもは着いてくるのに避けているらしく、顔も合わせなかった。

そして、夕方近く。

私は校門でミヤを待っていた。

夕方に赤く染まる空に冷え込む気温。

トレンチコートの前をかき寄せる。

程なくしてミヤが出てくる。

彼女は少しギョツとしたように立ち止まり、その後こっちへ歩いてくる。

何かあったと言っているようなものではないか。

口を開こうとした彼女の機先を制して言う。

「何かあったのかい？」

そう問うと、ミヤは顔を歪めた。

泣きそうな瞳。

いつも笑っている彼女の、そんな顔を見るのは初めてではない。
ミヤは私の胸に飛び込んでくる。

私の体に腕を回して。

伝わって来る体温。

少しの湿気。

「しばらく、このままで居させて」

「ああ」

涙にしゃくりあげながら言う彼女の髪を撫でる。

少し固めのハネた髪を。

ミヤが落ち着いたところで工場地帯の一望できる公園に入る。

「はい、コーヒー」

ミヤに温かいコーヒーを渡す。

泣きはらした目で恥ずかしそうに彼女はそれを受け取る。

いつもよりずっと口数が少なく、しんみりとした彼女は、こう言う
うと何だけでもずっと可愛くみえる。

彼女だって女の子なのだ。

受け取ったコーヒーのプルタブを開けて、少し逡巡してからミヤ
はマスクを、外す。

私の予想通り、口元にアザがあった。

「父親に殴られたの」

彼女の父親は酒を飲んで彼女を殴ることが少なくない。

今まで目立たない所だっただけで何度かこんな事があった。

その度に私は何も出来ない自分に苛立ったものだ。

彼女が親戚の店のスタジオに行っではドラムを叩いている理由の
一つはそれなのだ。

少しでも、家に居たくない。と。

当然彼女の母親はそんな父親を見限り、去っていた。

シングルマザーの私の逆だ。

私は暫く考え、言う。

「ミヤ、私の部屋に來い」

二人で住もう。と。

「え、でも」

「いいから。まだ父親は家に帰っていないだろう？すぐ荷物を纏めて」

バイクで行くから荷物は少なくね。

そう言うのと、またミヤは涙を流した。

「ありがとう」

私はそれを抱きしめる。

全く、仕様が無い奴だ。

そう思いつつ、私は口元が緩んでいるのを感じた。

一度別れてから私はバイクに跨る。

中古で買ったSR。

400の黒いやつに。

ビッグシングルの鼓動を感じながらミヤの家の前に行くと、もう

そこには彼女が立っていた。

はちきれそうなリュックサックを背負って。

もうそこに涙の余韻は無く、いつもの笑顔があった。

やっぱり彼女の笑顔が好きだ。

「じゃ、行こうか」

そう言うのと彼女は後ろに乗る。

スロットルを絞って加速。

体に回された腕がキュッと、少し力が入れた。

二人乗りも悪くないな。

そう、思った。

心配していた学費や生活費の問題は楽に解決した。

ミヤの父親が彼女の口座に振り込んでいたのである。

彼も根っから悪い人ではないのである。

残りの荷物をミヤが取りに行った時、彼女の机の上にはひとつ、
“すまない”と書き置きがあったらしい。

ミヤは“夢が一つ叶った！”と部屋に来た日に言った。

何かと聞けば私との二人暮らしとのことだった。

……まあ、キスくらいはプレゼントしてやろう。

encore 03 : Piano

「ライブ、一ヶ月後だから」

開口一番そう言ったのはレイン。

「また唐突ですね」

「うん、イベントでバンド足りないんだってさ」

そう言ってイベントのポスターを出す。

「……ガールズバンドナイト？」

読み上げたアヤが疑問の声を上げる。

「となると、今回僕はお休みですか？」

何故かフェイスレスは男が僕一人。

別の所からベースを読んで来るのだろう。

少し寂しいけど。

でもアヤのステージ姿は見てみたいかな。

そう思っているとアヤが頬を染めて上目遣いで睨んでくる。

正直可愛い。

「……口に出てた」

どうやら独り言を言っていたらしい。

「はいはい、お熱いですねー」

げんなりと言ったのは、ミヤ。

いつも通りポテトを摘んでいる。

「で、だ」

咳払いを一つしてレインが言う。

「カイリには女装してもらうから」

……はい？

ちよつと待て、何て言った、今。

助走？

いや、除草？

ああいや、序奏か。

もしかしたら助奏かもね。

「結構可愛くなると思っただよ」

そんな僕の現実逃避は、どうやら意味はなかったらしい。

「二重だし、目はぱっちりしてるし」

そう言っただのはアヤ。

何で乗り気！？

一応彼氏ですよ？

「見てみたいよね」

ニヤリと笑うミヤ。

……ああ、神よ。

「思いつきり飾れば分からないって」

「いやいや、別の所からベース連れてくればいいですよね？」

危うく纏まりそうな話を途切る。

「ベースの人口は少ないのだよ？」

確かに一利ある。

ギター、ベース、ドラムは五十対五対一くらいなイメージは有る。
でも。

「それに君が抜けてはフェイスレスの曲にはならないしね」

そう言っただけに額をつつかれる。

そう言っただけで嬉しいが、技術的に僕より上の人は多い。

というか、忘れられがちだが、僕はまだベースを始めてそんなに時間は経ってないのだ。

「自信持って」

何故か目をキラキラさせて言うアヤに丸め込まれて頷く。

後から考えればベースじゃなくて女装についてかも知れなかった。

「……もうヤダ」

鏡に映っているのはゴスロリ？って言うのか、フリルをふんだんに使った黒っぽい衣装を着た、少女？

長い黒髪がさらりと後ろに流れ、首もとを隠すようにこれまたフ

リフリな首輪みたいなのを着けてる。

そして留めはミヤの化粧。

うまく顎のラインを消してやがる。

そしてカールした長い睫毛。

……うん、女の子だ。

「もうヤダ」

何か、色々と。

「似合ってる似合ってる」

アヤがニコニコと笑っている。

珍しい事に。

こんなアヤの顔が見れるなら……良くない。

危うく騙される所だった。

「いや、身長的にも声的にも無理があるでしょう？」

「それは私に対する嫌みかね」

綺麗なハスキーボイス。

スラッとした長身のレイン。

……たしかに僕と身長もそう変わらないし、声は彼女の方が低い
かも。

何かに打ちひしがれた気分で、引きつった笑みしか出ない。

「私より胸あるし」

詰め物の胸をつつきながら言うミヤ。

因みにライブハウスで衣装合わせしてたのでは間に合わないから、
と今居るのはレインとミヤの部屋。

つまり、ここから移動しなくてはいけないのだ。

……この格好で。

「まあまあ、バイクには乗せて上げるから」

ニヤニヤとレインは笑う。

ミヤはミヤで何かため息吐いてるし。

「急にカイリが魅力的に見えてきたよ」

今まで僕はミヤにどう見られていたのだろうか。

そんなこんなで時間を使ってしまったので、ライブハウスに向かう。

ロングスカートで乗るバイクがどんな感じだったかは、言うまでもないだろう。

「おはようございます」

「あ、おはようござ……あれ？」

一目見てそう言ったのは今日一緒にやるバンドのメンバー。何度か一緒にやったことのある人で、一度はステージ上で煙草吸おうとして退場になったパンクな人。

「これ、サポートメンバー」

ミヤが僕の肩に手を回して言う。

「あ……ミノリって言います」

ミノリなら女の子でも通るだろうというレインの一言で、今回は本名で行く事になった。

「あ、そうなんだ。よろしく」

恥ずかしがり屋さんだね。

そう言って笑うパンクな人。

因みにパートはボーカル。

「顔、赤いぞ」

からかうのはミヤ。

「ミノリちゃん」

アヤが不思議な呼び方をして歩いてくる。

パンクな人はメンバーに呼ばれたようで帰って行った。

「はい、ベース」

そう言って渡されたのは木目が見える程の赤が綺麗なSGベース。この色は好きだ。

ベースまで一緒にバレるとの事で急遽、宇都木さんのコレクションから出てきたもの。

「SGベースってピックで弾かないと申し訳無い気になるんだよね」

「気持ち分かる」

現実逃避気味に言った事に相槌をうつてくれるアヤ。

「……やっぱりミノリちゃん可愛いよね」

でも一言余計。

SGベースを肩に掛けた時に言うのには何か理由ある？

「ほら、お嬢ちゃん方、リハやるよ」

馴染みのPAさんの声。

「あれ？新しい子かい」

どうやら彼にも分からない様子。

余りに念入りな化粧と体のラインをごまかす服だから仕方ないの
だろうか。

「そ、ミノリちゃん」

レインがニヤニヤしながら言う。

さあ、行こうか。

そう言うってレインはステージに上がる。

狭い控え室からすぐステージは繋がっているのだ。

僕も肩からSGベースを提げてステージに上がる。

アンプ直だから、用意と言っても余りする事は無い。

明るい照明に照らされて、尚の事恥ずかしくなってくる。

リハが終わって本番になれば他人の目に入るのだ。

いつもとは違う緊張がある。

……正直リハは最悪だった。

もともと無い自信が更に限りなくゼロに近づき、何時も以上に技術不足が浮き彫りになる。

それでもアヤや、みんなは笑っていたけれど。

つまりはネタだから、あるいは知らない人から見たら借り物のベ
ーシストだから。

ちよつと複雑な気分をしながらステージを降りる。
これじゃ、駄目だ。

スリーコードの力強いナンバーが気密扉越しに聞こえる。
一つ前のバンドの最終曲。

パンクらしい単純さの中に高い技術が時折伺える。
何よりリズムを外さないリズム隊は凄い。

「さて、覚悟はいいかい？」

レインの声に頷く。

前のバンドが終わり、遂に出番。
流れる入場曲。

ドアを開けた先には、ライトと、観客の熱気。
そうだ。

ここが、僕らの立つべき場所。

吸い寄せられるようにアンプの前に陣取る。

何人か見知った顔もある。

フェイスレスのファンだ。

やってやろうじゃないか。

MCも無く、一曲目からベースで始まる。

目配せをする。

頷くアヤ。

背中に回した手で親指を立てるレイン。

ミヤは軽くフロアタムを叩いた。

ピックを思い切り上げて、弦に叩きつける。

吹っ切れた。

ベースの違いだけじゃない、確かな音の違い。

いつもより動くライン。

アグレッシブに。

いつものカイリでは無い、今だから。
今見られているのはカイリではない。

“ミノリちゃん”なのだ。

だから、もう関係ない。

失敗を恐れず突っ込んでいく。

動きまわるベースライン。

案の定幾つか音を外したけど。

後ろを見ると全員が楽しそうに笑っていた。

観客もちよつと引いてたけど、段々とノツてくる。

楽しくなって首を支点にベースを回す。

ロックピンだから出来る芸当。

最終的に曲はいつもと全然違うアレンジになり、強引にアヤのギターが軌道を戻したり、何か、互いに音をぶつけ合うみたいな事になっていた。

ステージから下がるときにミノリちゃんとかんだ声が聞こえて複雑な気分になったのは秘密だ。

後でアヤに

「カイリのベースの重要性がよくわかった」と言われた。

滅茶苦茶だったもんね。

ただ客受けは悪くなかったらしく、後々フェイスレスのベースは二人居る。とか噂になった。

曰わく、カイリの時は正にフェイスレスらしい、世界観のある曲を聞け、ミノリの時にはノリのある激しいステージパフォーマンスが見れると。

そんなこんなで希望が多かったので、女装が一回で済まなかったのも、秘密だ。

encore 04 : drop

ロツクのベースストにテクニカルなフレーズは必要か？

そう問われれば、俺ならNO、と答える。

「よっ、久しぶり」

久々の伯母宅。

「何しに來たのかい？裏切り者」

そう言ったのはレイン。

それは俺が付けた名前だ。

「おいおい、いきなり挨拶だな、従妹殿？」

「否定はしないんだね、ユウキ」

互いに名字は結城なのだが、別に名字で呼ぶ程遠い仲と言うわけではなく、それが俺の……言うなればバンドネームと言った所なのだ。

「そついや今お前って寮住まいじゃ無かったか？」

「荷物を取りに來たんだよ」

言われてみればその手にはベースケース。

最初から付属していた薄っぺらい奴。

俺が初めて買ったアリアプロのベース。

「それ、まだ使ってたのか」

「もう二個程は使う気にはならなかったからね」
で、何しに來たの？

腕を組んで冷やかな目でこっちをみるレイン。
いつの間にこんな仲になっちまったかな。

「いや、俺も預けてた物取りに來ただけだよ」

僅かに身動きするレイン。

「サンダーバードかい？」

「ああ」

ギブソンサンダーバード。

プレベと並びルックスもサウンドもロックには最高のベースだと俺は思っている。

勝手知ったるなんとやらで部屋に入ってベースを出す。

「……アティテュードは？」

玄関からレインが声をかける。

「……お前ん所のベースにでもやってくれ」
「ふざけるな……」

低く、唸るような声だった。

「お前の所のベースもなかなか悪く……」
「出てってくれ」

レインは呟くように言う。

「貴方の話は聞きたくない」

色んな感情が攪拌され、混じりあった声。

「ああ、分かった」

俺にはこれ以外の言葉があっただろうか？

俺の居場所は今やここでは無いようだ。

フェイスレス、今のレインのベースリストはあの少年なのだろう。

勝手な願いだが、彼にはレインを裏切って欲しく無いと、そう思った。

フェイスレスなんて名前をつけたのに、な。

05: our sound

「たまにはカイリの作った曲もやってみたい」

スタジオでの練習、ちょっとした休憩時間にぼつりと言ったのはアヤ。

「え」

つい、そんな声が漏れる。

「そうだね、そろそろカイリにも一曲くらい任せたいかな」
レインが流し目でこつちを見やる。

「そんなに身構えないでリフの一つでもいいからさ」

ミヤは相変わらず笑いながら。

皆乗り気である。

「いやいやいや、そんないきなり言われても」

大丈夫、と言ったのはレイン。

「次のライブに仕上があればいいから」

全然大丈夫では無い。

次のライブまで後一ヶ月も無いのだ。

「期待、してるから」

アヤまでそう言う始末。

こうして、自分は初めての作曲をすることになったのだ。

家に帰りベースを抱える。

作曲の本を開いてはみたが、その通りに作ったのではどうしても腑抜けたポップスになる。

どの音が繋がると格好いいか、どんなリフを刻むのか、そう考えると、自然何時も使っているペンタに帰ってくる。

時折ブルーススケール何かに行きながら色々と試行錯誤、良い音の繋がりが見つかる度にメモを取っていく。

何時しか部屋には月明かりが差し、メモを取った紙に囲まれなが

ら、段々と楽しく感じている自分に気付く。

そう、何かを作ると言うのはこんなにも楽しい事なのだ。

深夜も二時を回った頃、ようやくできたイントロ、Aメロ、Bメロ、サビのループを弾きながら、僕の脳裏にはレインの甘やかなギターとアヤのきらきらとしたサウンド、踏み分ける強いミヤのドラムが流れていた。

「……鏡、見た？」

翌日、迎えに来たアヤに言われた。

それほど、疲れて見えたらしい。

自分としてはかなりノッてただけれど。

体育の授業では足がつり、休んでいたはずの保健室で終業まで寝ていた。

徹夜明けの激しい運動、ダメ、ゼツタイ。

因みに起こしてくれたのはアヤで、聞けば結構長い間付き添いしていてくれたらしい。

翌日。

前日死んだように寝てたお陰で体調はすこぶる良かったが、自分の作ったベースラインだけの曲を出す事を考えると、若干気が重かった。

「さて、できたのかい？」

そう聞くレインの目が嬉しそうに輝いて見える。

尚更出しにくいじゃないか。

「はい、一応……」

タブ譜とコードを書いた紙を出すと、レインは軽く頷いて確認する。

パッと見たと思ったたらもうギターを担いで居るのだ。

軽く弾くだけで、僕の理想に近いメロディが流れる。

ベースラインを見ただけなのに。

「テンポは、これくらい？」
うなづく。

一日かけて作った労力が、そのまま報われたかのような、不思議な脱力感を感じながら、暫くその音に聞き入っていた。

けれども、当然それで終わりでは無い。

ライブに向けてその曲を練習しなければいけないのだ。

基本的には単純で力強いロック。

マイナーを多用した進行で出来たその曲は、皆のダメ出しやコードの見直しを受けながら組み直されていく。

何より、一人ベースだけで聞くと良いラインでも、他と交わると汚く聞こえたりするのだ。

ライブ数日前に本当の完成を見せたその曲は、僕の手を離れて、フェイスレスの中で育った。

確かに皆の音がして、けれども骨子は僕の曲。

ライブを控えた数日前に僕は不思議な感動を覚えていた。

蛇足にはなるのだけど、あまりMCをしないフェイスレスだが、珍しくミヤが曲の合間に喋った。

「この曲はカイリが作りました、こんなんフェイスレスじゃねえ、って方はペットボトルでも投げてください」

そんな事を言って、四カウント数え始めるのだから酷い。

反応する間もなく曲は始められたのだった。

幸い、ペットボトルは飛んでこなかったのだけれど。

「曲、良かったよ」

そうライブの後に言ってくれたアヤの笑顔が、せめてもの救いだ
った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5293/>

フェイスレス・アンコールロッキン

2011年3月29日20時55分発行